Y09b　高校生による流星群観測の意義と実際

有本淳一、留岡昇、長谷直子、山本翔 (塔南高校)、坂元誠 (みさと天文台) 、塔南高校地学部

塔南高校地学部では 1998 年 11 月のしし座流星群の観測を行った。今回の観測は「しし座流星群全国高校生同時観測」に伴うものであったが、本校では「同時観測」事務局の推奨する眼視観測以外に FM 観測、I.I. を用いたビデオ観測を行った。また、観測にはみさと天文台の坂元も参加し、本校教員と分担して高校生の指導にあたった。

観測の経過として、まず、観測当日に先立ち、事前の勉強会を行い、流星の正体や発光原因、観測の方法などについて議論した。さらにインターネットのビデオ会議システムを利用して東大付属中・高などと意見交換や交流を図った。そして、最終的な観測方法や計画は生徒自身が企画し、冊子を作成し、当日にのぞんだ。これらの流れは校外の専門家や学校間の交流、連携のあり方を改めて考える上で意義のあるものだったと考える。

当日は快晴に恵まれ、眼視ではピーク時に HR79 という結果が得られた。詳しい結果については会場で報告する。

また、今回の観測に際して、流星群観測と高校地学 Ib のカリキュラムとの比較を行い、それらの親和性や実習としての位置付けについて考察した。その結果、視差や明るさ、色（スペクトル）など地学 Ib で学習する基本的な内容を含んでおり、さらに流星自体がもともと生徒たちの興味・関心の対象となっていることから、教材として、実習として観測する意義があることを再評価した。

年会では教材、実習としての評価、今回の観測の意義とその結果について報告する。